

「僕は千葉県の 野球人です」



新日鐵住金かずさマジック 渡辺俊介 選手兼任コーチ 独占インタビュー



穏やかな微笑みを浮かべてそう話すのは、「ミスター・サブマリン」こと渡辺俊介投手。大学卒業後に社会人野球の新日鐵君津に入社した1999年以来、千葉ロッテマリーンズで日本一、ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で世界一と、千葉の野球ファンに夢と感動を届けてきた。2年間の海外挑戦でグローバルな視野を広げて昨年12月、新日鐵君津の後身チーム「新日鐵住金かずさマジック」に復帰。ローカルに根ざした古巣に、選手兼任コーチとして新しい花を咲かせようとしている。

日本から米国へ「色々吸収したかった」

——千葉の野球ファン、スポーツファンにとって渡辺選手は特別な存在。ご自身も千葉に特別な思いがありますか？
渡辺 16年前にこのチームにいたときから、千葉で野球をさせてもらっている。僕は栃木県出身なんですが、野球歴、過去している時間は長い。妻も千葉県出身だし、今住んでいるのも千葉。第二の故郷、地元ですね。それくらい特別なもの。僕は「千葉県の野球人」です。
——13年オフ、自ら希望してロッテを退団。決断したときの気持ちは？
渡辺 ちよっとした寂しさとか、申し訳

ない気持ちはあったのですが、それ以上に違う世界を見てみたいという気持ちの方が強かった。13年間ロッテでプレーしている間に、WBCやオールスター戦で他のチームや他の国の人と接する中で、全く自分の知らない考え方ややり方とかがあるのを知る過程で、もつと色々なものを見たくまりました。一番はメジャーリーグのマウンドに立ちたいという気持ちですね。また残りの半分は違うもの、様々な野球を見て学びたいという気持ちが強かった。それで千葉県を飛び出し、2年ほど北米、南米に野球を勉強

するため滞在しました。

——帰国してかずさマジックに復帰した理由は？ 海外挑戦に未練はなかった？

渡辺 正直言って、韓国、台湾、イタリア、メキシコ、ベネズエラなど、いや日本も含めて(オフアが)全くなかったわけではないのですが、海外で選手が球場に子どもや奥さんを連れて来たりするのを目にして、やっぱり家族と一緒に野球に携わりたいたいと思いました。すると一番わくわくし、その条件に合ったのがここでした。都市対抗野球ってものすごいプ

レッシュャーがかかるんですよ、プロ野球の日本シリーズ以上に。実は今までの野球人生で最も緊張感を感じたところで、もう一回やってみたいと思いました。新日鐵君津ではベスト4が最高。社会人でナンバーワンにはなっていない。だからそれを達成したかった。その両方があった、ここしかないと思いました。

——海外経験が指導に活きていますか？
渡辺 米国の独立リーグでは、皆、何かがちよっとずつ足りなくてそこにいる。でもそれを克服してメジャーに行くという、向上心とかモチベーションを持っている。お給料も安いし、お客さんが少ない中でもやり遂げなければならぬ。

独立リーグと 社会人野球の共通点

そういった姿がすごく似ています。プロを目指しているけれど、あと一つ何か足りない。能力のある選手たちをどうやって乗せて、うまく大成させていくのか。今になって思えば、独立リーグの監督とかコーチがされていたことは本当に勉強になりました。

独立リーグはお金がそれほどかかっていないスタジアムでも、選手が歩く所だけはきれいに整備されています。雨で試合が中止となると、突然、映画鑑賞会が始まったり、テンションが上がると映画を鑑賞し、皆で「行くぞー」という高揚感を味わったり。「おっ」とか「なんかいいな」という仕掛けがいろいろあります。そういったことはとても勉強になりました。



千葉ロッテやWBC日本代表でもサブマリンは貴重な戦力だった

ました。実は、ここも設備環境は決まっていたとは言えなかったのですが、西洋芝の種をまいたり、様々な工夫をしていくうちに、見た目だけはメジャーリーグの球場のように整備されてきました。施設はプロに劣っているかもしれないですが、毎日少しずつでも改善されていくと気持ちやモチベーションまでアップしてきます。練習メニューも含めて、やる気になる仕掛けをあらゆることに用意することは、米国での経験がとても役に立っていると思います。

—— 渡辺選手がプロ入りする前の新日鐵君津と今のかずさまジツクでは違いを感じますか？

渡辺 違いというより、僕が受けた印象として言わせてもらうのであれば、戻る前は地域の方々にこんなに応援されているとは思わなかった。新日鐵君津は関連会社の方々に応援されていたイメージがあります。今はタクシーの中に選手の顔写真とか、街のどこに行ってもチームのポスターを貼ってくださっていて、選手もよく声をかけてもらったりしています。またプロとは違った、地元密着特有の温かさを感じます。僕が在籍していた時と比べたら、すごく変わりましたね。選手はそれもすごくいいモチベーションになっていると思います。

—— 今後の夢をお聞かせください
渡辺 やはり都市対抗野球で優勝です

千葉県が ジュニア育成の 模範となつて欲しい



チーム最年長。若手にも積極的に声をかける

ね。都市対抗って地域ごとの代表が出る大会だから、『千葉県君津市』と名乗って出るわけです。是非とも、君津市の代表として優勝したいですね。

—— 高校球児は夏の甲子園を目指す追い込みの時期ですが、ご自身の思い出はありますか？

渡辺 僕は2番手投手だったのですが、チームがすごく強くて絶対に甲子園に行けるものだと思っていたのです。でも、結局行けなくて。甲子園というのは、なんだかよく分からない、言葉では表現することが出来ない魅力があるんですよ。一つの目標に向かって何も考えずにあれだけ頑張れる時間というものもないと思う。本当に特別な時間。とにかく思い切っちゃってほしい。ただ、無理してケガだけはしないように、周りの大人たちがきちんと目を配ってもらいたいと思います。

—— これから千葉県のスポーツ界全体に期待することやエールをお願いします
渡辺 千葉県はスポーツをやる、スポーツに打ち込む人には、場所的にも気候的にも素晴らしい環境が整っています。温暖だし、首都圏にも位置する。よって医療関係、トレーニング領域などの分野で最先端な情報や技術が導入できる。将来は、それらを活かした設備をもっと整え、ジュニア世代や小中学生、高校生などの育成システムをもっと充実させて欲しいと思います。運動神経がよくて、潜在能力があるアスリートをどこで、またどのように育てていくかということはとても大切なことです。それらを大学などが中心になってやってくれないかなとは感じています。米国では小さいときから数種

渡辺俊介選手兼任コーチ独占インタビュー



類の競技のスポーツに挑戦することが出来、その中で自分に合ったものを成長段階時に選択できます。日本では小さいときからずっと野球みたいな…。やっぱり摘み取るのではなく、可能性が広がるような取り組みを千葉県が率先してやってほしいと思います。



左:宮本美咲樹(経営社会学科2年) 右:秦 愛海(現代社会学科2年)

「何でもいいんです。自分の力が一番必要とされ、活かしてもらえる場所が野球界だけでなく、スポーツ界にあれば。自分が一番貢献できることをずっとやりながら生きていたら幸せだと思っただけです。渡辺投手はそう将来像を話してくれた。そして今の環境を心の底から楽しんでる。君津球場を所狭しと走り回り、練習や指導の間も笑顔が絶えない。チーム最年長が率先して声を出し、若手にも視線を合わせてアドバイスする姿がとても印象的だった。

インタビュー後記